Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-10

（日清・日露戦争）欧米列強の脅威、そして朝鮮の誤算

木村，幹

(Citation)
歴史街道,356:90-[93]

(Issue Date)
2017-12

(Resource Type)
article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004965

欧米列強の脅威、そして朝鮮の誤算

日清・日露戦争

Kimura Kan
木村幹
PROFILE 神戸大学大学院国際協力研究科教授●一九六六年、大阪府生まれ。専門は比較政治学、朝鮮半島地域研究。著書に『朝鮮半島をどう見るか』、『高宗・閔妃』、『韓国における「権威主義的」体制の成立』（サントリー学芸賞）、『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識』（アジア・太平洋賞）、『日韓歴史認識問題とは何か』（読売・吉野作造賞）などがある。

最も平和だった江戸時代

明治日本を語る上で欠かせない、日清・日露戦争。

言うまでもなく、日本は日清戦争においては清（中国）と、日露戦争ではロシアと戦った。しかし、戦争を誘った一つの要因が朝鮮側にあった事実は、あまり語られていない。

日朝の歴史を振り返ると、日本でいう江戸時代が、最も平穏な時代であった。

当時、日本と朝鮮は、ともにいわゆる「鎖国」状態にあり、交流は極めて少なかった。よく朝鮮通信使が話題にされるが、二百六十年でわずか十数回のみだ。

しかし、漂流民を互いの国に帰す送還システムは、十分に機能していた。すなわち、両国は阿吽の呼吸で交流をコントロールし、平和な状態を生み出していたのである。もしも交流を深くすれば、徳川幕府の将軍と朝鮮王朝の国王のどちらが上か、などの潜在的でナイーブな問題に向き合う必要があるからだ。

一方、朝鮮が深い関係にあり、様々な問題が生じたのが、清であった。

清の前の王朝である明と朝鮮の関係は、徳川幕府と地方の有力藩に喩えるとわかりやすい。たとえば薩摩藩は、通常その内部の政治で幕府に干渉されることはない。しかし、幕府がその気になれば、干渉を免れることはできない。

だが、一六四四年に清が誕生する。国を建てた満州族を、朝鮮はそれまで北方の野蛮人だと見下していた。そんな相手に、明と同じ関係を続けるべきか、国内は紛糾した。

一方の清も、朝鮮が自分たちを馬鹿にして

十九世紀、欧米列強の侵出によって、東アジアには激震が走った。ウエスタン・インパクトとも言うべき出来事だが、その後、日本は国運を懸けて日清戦争、日露戦争に臨む。そうした東アジア情勢で、キーとなっていたのが朝鮮の動きであった。

朝鮮の景福宮・勤政殿
（写真提供：アマナイメージズ）

きたことを知っている。結果、清と朝鮮は多くの問題を抱えたまま、十九世紀の〝ウエスタン・インパクト〟を迎えることとなる。

日・清・朝、それぞれの西洋との出会い

東アジアにおいて、最初に欧米と対峙したのが、清だ。一八四〇～四二年のアヘン戦争で、清はイギリス軍に屈服した。

次が、日本である。象徴的なのが、嘉永六年（一八五三）のペリー来航であり、さらに安政五年（一八五八）には、日米修好通商条約を締結した。

そして朝鮮が、一八六六年にフランス（丙寅洋擾）、七一年にアメリカ（辛未洋擾）の侵攻を受け、列強の脅威と直面した。

当時の朝鮮国王は高宗であったがまだ幼く、その実父・大院君が権力を握っていた。

朝鮮国王の特徴は、日本の幕府や大名と違って、独自の軍隊も経済基盤も持っていないことだ。加えて高宗の血筋は直系ではなく、王権強化に腐心する必要があった。

高宗や大院君が目指していたのは、王家を中心とした独立国家――ヨーロッパでいうところの絶対王政の建設だ。そんな時にやってきたのが、ウエスタン・インパクトであった。

写真は表示していません。

朝鮮は古来、地政学的に、東アジアにおいて欧米の情報や影響が最も遅れる位置にある。

日本は鎖国制度を布きながらも、西洋の知識を得ていた。しかし、朝鮮には出島のような存在すらもなく、前述の通り、欧米の軍事勢力が現われたのも最後であった。

そんな「閉じられた世界」で生きてきた朝鮮にとって、モデルとして目を向けられるのは、まず隣国だった。

しかし当時の日本は、そのままではモデルにはならなかった。後世を生きる我々には、開国して富国強兵を果たす日本は成功例に見える。しかし当時の朝鮮王朝からすれば、「旧体制の徳川幕府は吹き飛んだ。もしも同じ道をたどれば、朝鮮王朝も消滅する」と見えていた。江戸幕府と良好な関係を持っていた朝鮮王朝からすれば、当たり前の理解だと言える。

他方、朝鮮は清からも異なる教訓を得ていた。それは、西洋列強に対するのに、「軍事的オプションはありえない」ということだ。朝鮮は自国を「小国」、清を「大国」と称することがあったが、それは複雑な感情を持ちつつも、清の圧倒的な軍事力を認めていたからだ。その清が、無残に敗北したのである。

では、文明開化の道を歩まず、軍事的オプションも諦念した朝鮮王朝がとった行動は、何か。それは「自らを守ってくれる同盟国を探す」ことだった。だからこそ朝鮮国内ではこの後、親清派、親日派、さらには親ロシア派が誕生する。そしてこれが、日清・日露戦争の背景の一つとなる。

こうした朝鮮の姿勢は、しばしば「事大主義」と称される。彼らの軍事的無力感に根差したものであることは事実であるが、それは同時に、「小国」が厳しい国際社会を生き抜くための術でもあった。

朝鮮王朝は財政規模が小さかった。たとえば、十九世紀末の明治政府と朝鮮王朝政府の財政状況規模を比べると、文字通り桁幾つも違う。

また、朝鮮王朝は幕府や諸大名のような強大な国家的軍事力も持たなかった。

だからこそ朝鮮は、時には国内の反乱鎮圧にも、より大きな軍事力を持つ周辺国に依存した。しかし、ここで留意しなくてはならないのが、朝鮮ではそれを必ずしも、卑下しなければならないことだとは、考えていなかったことである。「自分たちは弱者なのだから、強者の庇護をうけるのは当然だ」。彼らは時に、そう堂々と主張した。

この一見、我々には受け入れがたい「割り切り」は、実は極めて現実的な思考である。大きな財源を持たず、それゆえに巨大な軍事力が持てなくても、国際社会で生きていくためには、どうすべきか。そんな命題と、長い歴史の中で向き合い、たどり着いたのが、事大主義、という戦略だと言える。

二つの戦争への道

さて、そんな朝鮮に、日本も清も影響力を及ぼそうとした。日本が安全保障上、清の勢力拡大を防ごうとしたのに対し、清の側もグレーゾーンにしていた朝鮮を実質的な支配下に置こうとした。こうして両国は衝突する。

一八八二年、朝鮮で壬午軍乱という内乱が起きると、清が混乱を制圧。そのまま、清軍は朝鮮に駐屯した。その後、金玉均ら一部開化派が日本公使館と組んでクーデターを起こすが、これも清軍が鎮圧した。一八八六年には、清の北洋艦隊が長崎港に寄港し、その威勢を誇る事件も起き、日本は清の勢力拡大に強烈な危機感を抱く。

こうして日清の緊張感は高まり、一八九四年の東学農民戦争をきっかけに、日清戦争へと突入。結果、日本が勝利した。

しかし、これで東アジアの動乱が治まった

わけではない。

日清戦争前、国内で親日派、親清派が勢力争いをしているなか、高宗はこのままでは両国のどちらかに呑み込まれるのではないか、と考えた。そこで浮上したのが、ロシアである。

当時の高宗から見て、ロシアほど頼りがいのある国はない。ニコライ二世のもと絶対的な王制が布かれており、軍事力も日本、清を遥かに凌ぐ、世界的な大国だ。

こうして高宗は朝露密約を結び、日清戦争後には、強まる日本の圧力から逃れるために、自らロシア公使館に逃げ込む、という思い切った賭けに出た。

結果、ロシアの勢力を引き込み、日露両国の間で均衡状態を作り出すことに成功、高宗は一八九七年、大韓帝国の成立を宣言する。中国の威勢を恐れて、「国王」の称号に甘んじてきた朝鮮の君主が、「皇帝」の称号を得たのは、歴史上初めてのことであった。

しかし、こうしてロシアが勢力を南に伸ばしたことを、日本は自らへの深刻な脅威だと捉えた。そして、日露戦争が起きる。

有名な風刺画に、日本と清が朝鮮半島を釣り、その様子をロシアが睨む、というものがある。だが実際は、朝鮮はただ釣られていた訳ではない。日清両国に釣られそうになった朝鮮は、自らロシアの方に向かって跳ねて見せ、ロシアを朝鮮半島に引き込んだのだ。事大主義だからと言って、朝鮮は「ただ釣られるのを待つ」という受動的な国ではなかった。

その意味では、日露戦争は高宗の巧みな——しかし危険な—勢力均衡外交がもたらしたものだ、と言えなくはない。つまり、高宗は自国が生き延びるため、自ら朝鮮半島を「東洋の火薬庫」にしたのである。

しかし、高宗のサクセスストーリーはここまでだった。日本がロシアを破り、朝鮮半島における日本の権益を、日露両国のみならず、英仏米を含むすべての列強が認める、という事態が出現したからだ。そして「勢力均衡外交」というカードを失った韓国は、日韓併合へと進むことになる。

最後に、歴史のイフを考えるならば、戊辰戦争で、徳川慶喜が積極的にフランス軍を招き入れて徹底抗戦をしていれば——。幕府は勝利しても、日本はフランスの絶大な影響下に置かれてしまっていたかも知れない。自らの権力を守るためには外国勢力をも利用する——。慶喜が取らなかったその選択肢を、現実に移したのが高宗だった。そしてそれは彼にとって、必ずしも間違いではなかったのかも知れない。なぜなら、慶喜が早々に政権を失ったのに対し、高宗はあの混乱を極めた朝鮮半島において、一九〇七年まで君主の座を維持することに成功したのだから。

もちろん、歴史に正解はない。ただ、日本では、国内闘争があっても、「命までは取られないだろう」という認識があったのに対し（事実、長州藩の因縁の敵・会津藩の松平容保も切腹していない）、朝鮮や中国では政争に敗れた側は、厳しく処断された。そうした両国の歴史や様々な文化の違いも、歩む道を大きく分かった理由の一つかもしれない。

日朝関係史年表

一八四〇～四二	アヘン戦争。清、イギリスに敗れる
一八五三	日本に黒船が来航する
一八六六	丙寅洋擾。フランスが朝鮮に侵攻
一八六八	日本で明治維新が起こる
一八七一	辛未洋擾。アメリカが朝鮮に侵攻
一八八二	朝鮮で壬午軍乱が起きる。清、朝鮮への影響力を強める
一八九四	東学農民戦争（東学党の乱）。日本と清、朝鮮内の反乱鎮圧のため出兵
一八九四～九五	日清戦争
一八九七	高宗、ロシアを後ろ盾に、大韓帝国を成立
一九〇〇	北清事変、勃発
一九〇四～〇五	日露戦争
一九一〇	日韓併合